



STAP存在否定

論文の現象再現できず

理研、検証打ち切り

STAP細胞の有無を調べている理化学研究所は19日、小保方晴子研究員(31)が写真が検証実験でSTAP細胞を作れず、論文の内容を再現できなかったと発表した。理研は来春まで続ける予定だった検証実験の打ち切りを決定。STAP細胞の存在は事実上、否定されることになった。小保方氏は21日付での退職願を提出し、受理された。

小保方氏 21日付で退職



会見した実験責任者の相沢慎一特任顧問は「論文の手法で作製できるSTAP細胞はなかった。これ以上の検討は検証実験の範疇を超える」と述べた。理研はSTAP細胞の有無に決着をつけるため、小保方氏自身による検証実験を7月に許可。小保方氏は9月から3カ月間、論文(撤回済み)と同じ手法で作製に取り組み、期限の11月末に終了した。

実験では万能性の目安となる遺伝子が働くと、細胞が緑色に光るように遺伝子操作したマウスを使用。白血球の一種であるリンパ球を採取し、弱酸性の溶液に浸してSTAP細胞の作製を試みた。計48回の実験を行った結果、緑色に光った細胞もわずかにあった。小保方氏が参加しない理研の検証チームも成功しておらず、来年3月までの期限を待たずに実験の打ち切りを決めた。

STAP論文は多くの誤りが判明して7月に撤回され、科学的な根拠を失っている。理研は来年1月にも論文の新たな疑義について追加調査の結果をまとめ、小保方氏に対する懲戒処分の審査を再開し、どのような処分が相当だったかを公表する。



STAP細胞の検証結果について記者会見する理化学研究所の相沢慎一特任顧問(右)ら。19日午前、東京都港区(大西正純撮影)

STAP現象の検証結果について

実験総括責任者
独立行政法人理化学研究所 研究不正再発防止改革推進本部
検証実験チーム チームリーダー 相沢 慎一
研究実施責任者
独立行政法人理化学研究所 研究不正再発防止改革推進本部
検証実験チーム 副チームリーダー 丹羽 仁史

2014年12月19日

独立行政法人理化学研究所

STAP論文は多くの誤りが判明して7月に撤回され、科学的な根拠を失っている。理研は来年1月にも論文の新たな疑義について追加調査の結果をまとめ、小保方氏に対する懲戒処分の審査を再開し、どのような処分が相当だったかを公表する。